

# 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 42 2016.9

特別寄稿

舘脇 操先生小伝 (第1回) 五十嵐 恒夫 ----- 1

お知らせ

企画展示「ランの王国」終了御礼 高橋 英樹 ----- 4

活動報告

北大総合博物館の新しくなった展示の一部を紹介します 星野 フサ ----- 5

シェイクスピア、ポプラチェンバロと出会 雪田 理菜子 ----- 6

昆虫学論文別刷ファイル 中井 稚佳子 ----- 7

再発見！ハチ博士の北海道の旅 久末 進一 ----- 8

ミュージアム・カフェ「金曜ナイトセミナー」と  
「金曜ナイトコンサート」の紹介 星野 フサ・山岸 博子 ----- 9

北大構内食べ歩き 大山 圭也 ----- 10

特別寄稿

## 舘脇 操先生小伝 (第1回)

北海道大学名誉教授 五十嵐 恒夫 (1955年農学部林学科卒業)

### 1. 出身地と大学でのポスト

舘脇先生は、1899 (明治 32) 年 9 月 8 日横浜に生まれ、1976 (昭和 51) 年 7 月 18 日、入院中の病院で心不全のため逝去された。享年 77 歳であった。

先生は 1918 (大正 7) 年神奈川県立横浜第一中学校を卒業した。中学時代、当時東京帝国大学におられた牧野富太郎先生が毎月横浜植物学会に来ていたことが、先生が植物学に興味をもつ一因であったのかも知れない。

1918 年 (この年、北大は東北帝国大学農科大学から北海道帝国大学農科大学となった。以下では北海道大学という)、北海道大学予科入学により先生の札幌での生活が始まり、クラブは陸上競技部に在籍したようである。植物に興味を持っていたことから学部は農学部に進み、植物学教室の宮部金吾教授に師事した。当時は植物標本庫も植物教



舘脇 操先生  
北大農学部研究室にて、昭和 34 年 6 月

室の所有であり、主に宮部教授が収集された豊富な標本が収蔵されており、舘脇先生にとっては研究材料に恵まれた環境にあったと言える。昭和 27、8 年頃に植物学教室で宮部先生の記念行事があり、フィルムの上映もあったが、若き日の舘脇先生が標本庫から標本を採り出し、捧げ持つように宮部先生のもとに運ぶ場面が記録されている。

先生は、1924（大正 13）年、農学部農業生物学科を卒業、直ちに農学実科講師となり、1926 年には農学部講師、1935（昭和 10）年農学部助教授、1952（昭和 27）年農学部教授になられ、1963（昭和 38）年、定年により退職された。この間、1956（昭和 33）年から定年までの 5 年間、植物園長を兼務された。北大退職後は、酪農学園大学、札幌学院大学の教授として勤務された。先生は、講師時代 11 年、助教授時代 17 年、教授時代 11 年で、北大勤務の 72%の年月が講師・助教授時代であり、いわゆる万年助教授の状態であった。宮部先生の教授時代に植物分類学を中心とした講座の新設がなぜできなかったのか不思議なことである。

## 2. 植物園長としての先生

北海道大学植物園は、先生の恩師宮部金吾先生が現在地に作られたものである。舘脇先生は 1956 年から定年までの 5 年間、第 4 代目の園長を務められた。園地の片隅にあった園長官舎に居を移され、戦後の荒廃からの復興に尽力された。

私が舘脇教室を離れたのち、先生からは「君が調査に出かけるときは頼みたいこともあると思うので、事前に知らせてくれ」と言われていた。五葉松の重大病害を引き起こす病原菌の中間寄主植物が灌木のスグリ類であり、道内の病理研究者 5 名がスグリの発病状況を調査することになった。私の調査担当地区は阿寒、十勝、網走、礼文島となり、阿寒・十勝地区に出かけることを舘脇先生にお話しした。先生は、「十勝に行ったら植物園のスグリが駄目になっているので、採取してきて欲しい」とのことであった。

スグリ採取後の輸送方法が確立されているのを聞き、半信半疑であった。当時、札幌鉄道管理局の幹部の方の名前を荷札に書き、国鉄のどの駅でもいいから駅員に渡すようにというものであった。

幹部の方は、荷物が届くと舘脇先生に電話連絡をするという仕組みが作られていた。

指示にしたがい、蔓状に伸びたトカチスグリとエゾスグリを採取し、径 50cm ほどの輪にまとめ、根部にミズゴケを巻き付けてビニールで覆った。これに幹部の方の名前を書いた荷札をつけ、たしか幾寅駅に持ち込み駅員に輸送を依頼した。帰学後確かめると、スグリにはなんの事故もなく無事に植物園に届いていた。

先生は 1960 年頃、植物園長時代に種子交換のルートを作ったヨーロッパの研究機関からなのか少量のライラックの種子 7 種をもって見えた。当時、私は演習林研究部の実験苗畑の主任を兼務していたが、「木本植物の苗木造りは、植物園より君の所の方がうまいと思うので、苗木を作って植物園に渡してくれないか」とのことであった。当時は、技術職員に定年制がなく、70 半ばを過ぎた大ベテランの職員がおり、3 年ほどで 30cm を超える苗木に仕立て、植物園に移管したことがある。

## 3. 舘脇先生の思い出

以下では、先生のお人柄を示すものとして私（五十嵐）の思い出を述べる。

### 先生との出会い

私は中学生時代（札幌第一中学校）、植物に興味をもちポプラ会という生物部に所属し主として藻岩山で植物の観察と採集に明け暮れていた。私の父成八（ジョウハチ）は、若いころ旭川の小学校につとめていたが、植物に興味を持ち大正時代に大雪山の高山植物も採集し、不明種は北大の宮部金吾先生に見てもらっていたようである。当時、大雪山高根が原で採集したクモイリンドウは宮部・工藤両先生により、新種として発表され、*Gentiana igarashii* Miyabe et Kudo として種名にイガラシがつけられている。

私が採集した植物標本は、はじめのうちは父が見てくれていたが、そのうちに北大の舘脇君に見てもらったらどうか、と言って紹介状を書いてくれた。舘脇先生を君よばわりする父にびっくりしたが、父が宮部先生に教えを乞うていた頃は、舘脇先生はまだ学生でもなかったわけである。やが

て横浜から北大に入学した舘脇先生が宮部先生門下となり父と知りあい、高山植物の研究をされたときには父が実生で育てていた高山植物を研究材料として提供したようである。

父の紹介状と標本をもってアポイントメントもとらずに北大の研究室を訪ねたのですが、紹介状を読んだ先生は、「君が成八さんの息子さんか」と感歎され、丁寧に標本を見、いつでも聞きにおいでとイガクリ頭でいかつい体つきの先生にやさしく言われたのが、先生との出会いであった。

### 教師としての先生

**講義** 私は、2年生の秋に植物学汎論の講義をうけた。農学部に進学した2年生が対象の講義であり、あまり休講もなく、後半には自著の「樹木の形態」をテキストにした体系的な講義であった。林学科4年の時は、森林生態学の講義をうけたが、時期が前期(4月から9月)のせいもあり休講の方が多かった記憶がある。したがって、体系的な講義というよりは1回読み切り型の講義で豊富な調査結果に基づく講義は学生には大変魅力のあるものであった。成績の評価は面談で、個々の学生の自然観、学生の学問に対する姿勢などで評価されていたようである。林学科から私を含めて3人の学生が卒業論文研究のため先生に弟子入りしたが、成績評価の面談の時は、君たちは来なくていいよと免除された。

**卒業論文の指導** 私は、1954年4月卒業論文の指導を林学科ではなく植物学教室の舘脇先生にお願いした。先生は北限地帯ブナ林の総合的な研究を構想しておられ、もっとも整ったブナ林が大平山山麓の泊川流域にあり、函館営林局が3年前から林道を開設しながらブナの単木的伐採を開始したことを知っておられた。先生は伐採前に詳細な調査をし、記録を残すことを私に指示された。先生はこの年、文部省の短期在外研究員に選ばれ、8月からスウェーデンに出張されることになり、私は指導教官が不在になることに不安を感じた。

先生は、大平山の高山植物は見なくてよいからブナ林の調査に集中するようと言われた。かつて山本岩亀いわひささんが、尾根伝いに頂上をめざし3日目に大平山頂上の高山帯に達し植物を採集した記

録があり、この苦勞をさせるよりブナ林の記録をとの考えだったのかと思う。

1954年6月に教室の助手であった三角亨先輩と入山したところ、大平山山頂直下の沢縁に飯場ができており、付近のブナ林で伐採が始まっていた。10月までの5ヵ月間、延べ50日ほどかけ、泊川地域のブナ林の群落学的調査をベルト・トラクセクト法で実施した。また、晴れた日に大平山の頂上方向を見ると、頂上付近の岩峰が見え容易に登れることがわかった。伐採後の集材路をたどっていくと、ブナ林を出ると草本群落となり頂上につながっており高山帯の植物の採集もできた。

調査を終えてからは、調査データの整理と文章化、すなわち卒業論文の作成にとりかかった。教室で公表された論文を参考に文章化に努力するも思うように作業が進まず苦勞していた。

年末に帰国された先生は、昭和天皇へのご進講の準備、渡欧中の事務処理などを終え、2月の半ば過ぎから我々に対する卒論の指導が始まった。「ワラ半紙1~2枚でいいから書けたものをもってこい」との声がかかり、整理した資料とともに文章を持ってうかがい、つたない文章を読みあげると資料を見ながら聞いていた先生が、「君は何を言おうとしているのか」と言われ、私がこうなって、あんなっていたんですと答えると、「それならこう書けばいいじゃないかとおっしゃり、口伝されるのを私が筆記した。フィールドを見ていない先生が的確に表現されるのに驚きながらの作業を繰り返し、半月後には卒論の形が出来上がった。先生にお礼をいいながら、私の卒論か先生の論文かわからなくなりました。と申し上げると、「卒業論文というのは、人生で初めて書く論文だ。だから私はできるだけ良くなるように助言する。今後、この論文を参考に論文を書くように」とおっしゃられた。この言葉は深く私の心に刻まれ、その後学生の卒論指導に先生の考え方を応用させていただいた。

### 先生のエピソード

北大予科生の時は陸上部で短距離選手、本当でしょうか？伊藤誠哉先生の雅号「北洲」に倣い「蒙洲」と自称、そのため愛称はモーさん。先生を言

葉で表現すると、真っ直ぐな人、暖かい人、気配りの人、探究心の旺盛な人となるのでしょうか。先生には公私にわたりお世話になった。仲人をお願いしたり、自宅の中二階を貸してもらったり、子供が入院したときにはミニカーをプレゼントしていただいたりとか、細やかな気配りをいただきました。

先生が70代半ばの冬、朝8時半に研究室の電話が鳴った。受話器を取ると先生からで、「君、いま

手が空いているかい、空いていたら来てくれないかい」とのこと。研究室へ伺いますかと聞くと、自宅に来てくれとのこと。北4条西13丁目の自宅に伺うと、ドテラ姿の先生が台所のあたりでウロウロしている。「今、牛乳を温めて飲み、ガスを止めたが、止まっているか見てくれないかい」とのこと。「大丈夫です」と答え、「奥様は?」と聞くと、「ドイツに住む娘さんの所へ行った」とのことであった。(続く)

お知らせ

企画展示「ランの王国」終了御礼

総合博物館 高橋 英樹

9月27日高橋英樹教授から北大ボランティア宛てに以下のメールが届きました。

各位：

ランの王国展示は、9月25日に無事終了しました。においのワークショップ、チェンバロ演奏、会場係、講演会、などなど、さまざまな場面でお世話になりました。特にチェンバロ演奏では新妻さんにランの花やオーストラリアにちなんだ曲を演奏して頂き、大変感動しました。皆様のご協力に改めて感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

高橋英樹（ラン展担当教員）



## 活動報告

## 北大総合博物館の新しくなった展示の一部を紹介します

植物・図書ボランティア 星野 フサ

7月26日リニューアルオープンの式典がありました。そしてすでに1カ月が過ぎました。一番の変化は来館者が多くなり賑わっていることです。

1階の右側にミュージアムショップがあります。その向かいにカフェがこの度、開店し、座って休める場所が3部屋できました。この店のどの料理が人気なのかは不明ですが会話が弾んでいるらしいのです。

この度、北大の各学部の紹介コーナーがはじまりました。3階の壁には博物館ボランティアグループのいくつかを紹介されています。これらがリニューアルオープン以前の展示との大きな違いです。トイレも綺麗に立派になってとても感じの良い使い心地です。

1階から3階までのたくさんの展示のなかで私が興味をもった内容について少し紹介します。

300万点の収蔵品があるとのことですからこの数字によって本博物館が宝の山であることが理解されます。この収蔵品を限られたスペース内に研究資料としてだけではなく一般市民向けに披露するための先生方の御苦労の様子が伝わってきます。

たとえば、新しく登場したマンモスゾウの大きいこと目をみはるばかりです。この絶滅したゾウを正面から見ると少し首を傾けています。以前の展示ではゾウの産出地点の一つ一つに放射性炭素年代測定値が記入されていたと思いますが新しくなった展示ではマンモス産出地点が黒丸で示され、このゾウがロシアに多く、北海道内には4地点のみの産出であることが示されています。展示の視点が以前とは少し変わったことになるでしょう。マンモスの隣には「感じる展示」が新しく登場しています。根室市のガツカラ浜の地層が壁に展示されています。よく見ると点字での表示がついています。植物ボランティアの船迫さんの描かれた草原とともに津波で運ばれたと思われる大きな礫が触ってもらおうのを待っています。新しい視点がここにも広がっていることになります。

3階には皮膚の展示室がありますがこれは以前の展示とはあまり変わっていないようです。このように従来展示も一部に残っています。

なかでも圧巻なのは1階のノーベル賞を受賞された鈴木章先生展示のレベルアップに来館者の誰もが感動するでしょう。クロスカップリング反応をカニの右手と左手に例えて、起きる反応を分かり易く紹介しています。実際にビーカー内で起きる反応について紹介するにあたっては有機ホウ素に対する化学者としての鈴木先生が挑戦者として臨場感のあふれるテレビ映像で提示をしています。

9月25日まで「ランの王国」展が正面奥の部屋で開催されています。これも奥深い内容になっていて人気です。2鉢もの札幌近郊の野生ランの控えめな花が来館者を待っています。入口ではラン科の異なる香りが週ごとに来館者を待っています。そして奥の方では動画でラン科の花が発する性ホルモンに騙され誘引された雄バチの奮闘の様子が来館者を感動させているようです。

3階廊下のお宝新聞コーナーは図書グループの力作で感想をどうぞ！のノートに記された来館者の感想は北大総合博物館に携わる関係者を心から嬉しくさせてくれる文章が書かれています。

以前に廊下に木材の展示がありましたが倉庫入りかと思っていたら、「感じる展示」コーナーで一部が飾られていました。

3階の恐竜たちの展示室はかなり内容が変わりました。訪れたチビっ子たちは展示内容を思い出して夜眠れなくなるかもしれません。

私が最も興味のある地球上の大気に酸素をもたらしたおよそ20億年前のシアノバクテリアの化石と地球の歴史コーナーは廊下展示になっています。向かいの部屋は菌類、昆虫、植物が最先端の視点で来館者を待っています。廊下にもう一つ大事な展示があります。大型植物遺体です。名寄付近での産出です。どこでこんな大切な化石が崖にうずまっているの？しっかり棚を覗いてみましょう！

活動報告

シェイクスピア、ポプラチェンバロと出会う

チェンバロボランティア 雪田 理菜子

7月31日、日本英文学会北海道支部と博物館のジョイント企画として『シェイクスピア、ポプラチェンバロと出会う～レクチャー付きコンサート：王政復古期のシェイクスピアとその音楽～』が開催されました。博物館リニューアルオープン記念行事でもあり、100名超の方が来場され、大盛況となりました。

主催者である北海道教育大学の本堂知彦教授が司会を務められ、私は冒頭に導入部分としてポプラチェンバロの紹介と演奏をさせていただきました。今年はポプラチェンバロ誕生から丁度10年の節目の年でもあり、博物館のリニューアルと合わせて多くの方に知っていただく良い機会となりました。シェイクスピア(1564～1616年)の時代の曲の紹介として、演奏は有名な「フィッツウィリアム・ヴァージナルブック」から、当時のイギリスの音楽的な状況がよく反映されている舞曲などをお聴きいただきました。

本編は、秋田大学の佐々木和貴教授のレクチャーに沿い、小出あつき氏(ソプラノ)・森 洋子氏(チェンバロ)がシェイクスピアの劇音楽から10曲程度演奏されました。前半は『ウィンザーの陽気な女房たち』より「グリーンスリーブス」や、『オセロー』より「柳の歌」などの名曲の親しみやすい内容に加え、王政復古期のシェイクスピアの受容についてのレクチャーもあり、専門的な内容を含むものでしたが、興味深げに頷きながら聴く方が多い様子でした。シェイクスピア劇は、シェイクスピア没後、ピューリタン革命で王政が廃止され劇場が封鎖された空白期を挟んで、王政復古期にはフランスの影響を受けた劇形式、舞台様式、観客の嗜好の変化など反映して、ほとんどがエピソードや登場人物の追加等を行い改作改変されて上演されたそうです。改作に改作を重ね人々に親しまれてきたことによって、次の世代へ引き継がれ続け、現代の私たちに伝わっているのだと分かりました。



ウィリアム・シェイクスピア

後半は、シェイクスピアの劇作品のいくつかに音楽をつけた作曲家ヘンリー・パーセル(1659～1695年)に焦点を絞った内容でした。『真夏の夜の夢』を元にした『妖精の女王』や、『テンペスト』、『十二夜』など、どれもシェイクスピアのオリジナルにではなく改作部分に対して作曲されたもので、今日のオペラとは違い、演劇の間に歌と音楽が入る「セミ・オペラ」という形式上の作品でした。実演を聴いて、パーセルは言葉に対してとても感情的であり官能的な、非常に表現の伝わってきやすい音楽をつけたのだと感じました。

今回のレクチャーで、改作は、むやみにただ面白さを求めて行われていたわけではなく、シェイクスピアのオリジナルのセリフを、より人々が身近に捉えられるように、ストーリーがより伝わりやすく工夫されていたと考えて良いのだと分かりました。また、シェイクスピアはロマン派以降偶像化されてしまったようなところがありますが、そもそも作品はとてもエンターテインメント的で、お笑いあり、アクションあり、スキャンダルありの娯楽作品として、その音楽も含め、当時広く人々に親しまれていたのだと感じました。

## 活動報告

## 昆虫学論文別刷ファイル

図書ボランティア 中井 稚佳子

総合博物館図書ボランティアには現在 17 名が在籍しています。

活動内容は、総合博物館図書室の蔵書の配架ならびに修復、植物学や鉱山・地質資料梱包材新聞（歴史新聞）の整理と展示、そして昆虫学論文の別刷の分類と配架、リスト化の作業を行っています。

昆虫学論文の別刷とは、主に昆虫学の学会誌に発表された論文の、その著者である研究者の論文のみを配布用に印刷したものです。その冊子を世界中の研究仲間に送付することで、各研究者は研究室に居ながらにして自分の研究分野の最新の研究成果を知ることができるのです。

北大農学部昆虫体系学研究室では、この昆虫学の論文の別刷が、昆虫学講座を開講した松村松年初代教授の代より、100 年以上にわたって大切に保管されてきました。一番古い論文は 1800 年まで遡り（北大農学部昆虫学講座は 1896 年開講）、論文の著者も 5,606 名（2016 年 7 月現在）になります。これらの論文は各研究者が北大を退官するにあたって、昆虫学講座に寄贈したものが中心で、現在も増え続けています。

論文別刷は、薄く簡素な印刷物のため散逸しやすく、このように、200 年以上前から現在に至る昆虫学の論文が体系的に保存されていることは、世界的にも非常に稀で、昆虫学の研究にとって、貴重な資料といえます。

私たち図書ボランティアではこの昆虫学論文の別刷を、前任の天野哲也先生、現担当の大原昌宏先生のご指導の下、複数の寄贈先から集まった論文を著者名毎に分類してリスト化し、さらに、著者名毎に作成したファイルを配架する作業を行っています。2008 年 10 月から沼田、斉藤、久末、星野などわずか数名で始まったこのボランティア作業も現在は、作業人員も 10 名に増え、漸く著者名ファイルとリストの確認作業が終盤になりました。

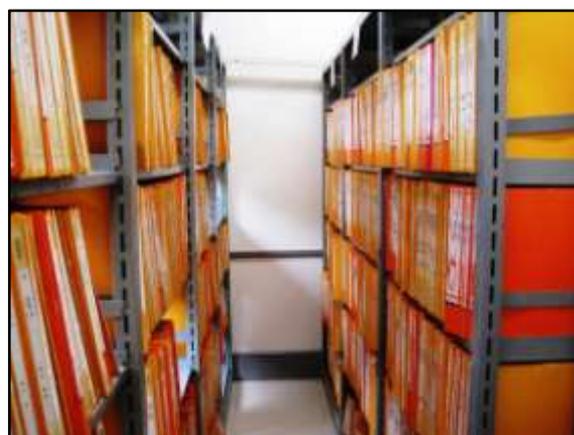
新しくなった総合博物館には、別刷資料室が設

けられました（N314 室）。そこには 200 年以上遡る、世界の昆虫学の論文が、所狭しと配架されています。IT 化の現在はペーパーレスが進んでいますが、生の論文に書き込まれた文字や、添付された手紙などを見ると、論文を書いた方、受け取った方、双方の研究者たちの昆虫学に向けた熱い思いが、時を経た今も伝わってきます。

また、作業を進めていると、日本の昆虫学が、当初は農業害虫の駆除を目的として発足し、発展した歴史がよく分かります。そのため、研究者の裾野は広く、各研究機関の研究者のみならず、在野の教師や昆虫愛好家からの論文も多く、中には高校生からの寄稿もあります。論文別刷ファイルではこうした生涯に一論文しか発表していない人の論文も名寄せファイルとして分類、保存をしています。

昆虫学は種ごとにグループ化されて研究が進められています。著者名をアルファベット順にリスト化することによって、これらのグループ検索も可能になります。将来的には、世界中からの検索に対応できるデータベースの構築を目指しています。

知の宝庫としてリニューアルオープンした総合博物館の一隅にある別刷資料室には、昆虫という小さな生物の大きな世界が広がっています。



別刷資料室（N314 室）の様子

## 活動報告

## 再発見！ハチ博士の北海道の旅

図書ボランティア 久末 進一

蜂類の分類学研究で知られた北大ゆかりの常木勝次博士（1908-1994）が、「北海道大博覧会」（札幌、小樽）開催中の道内昆虫採集旅行をしたのは、1958（昭和33）年8月のことである。その折の旅の見聞録を記した「北海道採蜂再訪記」（福井生物研究会会誌第6号、1958年刊）が、図書ボランティアが整理している昆虫研究論文別刷りの中にあつた。原文は長文だが、以下にそこに書かれたエピソードのいくつかを簡単に紹介する。

常木博士は、来道の時（1958年）は50歳。

国鉄列車で福井出発、青森から青函連絡船で函館、列車で札幌着（8月3日）。終戦前後の8年間、北大で学究生活を過ごした思い出の地への帰省だったが、札幌の変貌には驚く。市電が北18条から北24条まで延び、その以北はかつて「札幌飛行場」（旧北海タイムス社の報道機の滑走路、昭和8年から逓信省の飛行場）が在ったはずだったが何も無い。終戦の年、札幌の進駐軍（米陸軍第8軍の第9軍団・第77師団）によって飛行場は閉鎖。本土決戦に備えた戦闘機は燃やされ、その残骸が散乱する付近で、米兵が落下傘の降下訓練をしている。それを眺めながら、飛行場の隅で石塊混りの土地を掘り起し、にわか畑でカボチャやイモを育てた若き日の記憶が蘇る。

紅葉山周辺からネットを手に蜂を追う。目的は欧米の蜂学者との交換に必要な道産蜂の標本採集だが、昭和29年台風15号（洞爺丸沈没事件の台風）被害と、DDTやBHC農薬類の飛行機散布で、蜂の営巣地が狭められている。

定山溪を経て旭川・層雲峡（7日）、上川を経て釧路に到るが、当時は指定旅館付き割引クーポン券、共通周遊券を活用しつつ親しい友人、知人宅を泊り歩く旅である。層雲峡温泉では地元古老と交流。目方130貫、背丈9尺という大熊狩り写真に驚く。ヒグマには生涯褐色にならぬものがいて、金色、月輪、そして両肩から白毛がタスキに走る珍種もいた。

斜里では列車の隣席に「ガンガン」（缶）を背負った老婆が乗り込んで来て、やおら缶から大きなケガニを掴み出し、甲羅をはぎ、脚をむしり、胴体にいきなりかぶりつく。鬼婆そっくりで肝をつぶし、思わず「それ生か」、「いんや、煮てある、どうだ」と、脚をボキボキ折って3本も差し出す。恐縮して1本いただき、食べてみると美味である。このケガニ1匹が老婆の昼弁当なのだ。お礼に持参のパンを渡すと、大喜びだった。

函館山周辺での採集活動（12日）を終え、連絡船で青森（13日）、十和田山地をめぐり、福井へ帰る（16日）。青函連絡船について、“2等と3等で差別がある船は封建的乗物だ”と驚く。

限られた旅程の中で、札幌周辺で「フタモントゲアナバチ」「キスジツチスガリ」「エゾギングバチ」他、道産の標本類を採集した。

常木博士は、埼玉出身で1944年4月から1952年9月まで北大助手、同10月から1975年まで福井大学教授を勤めた。1975年定年退官、その後は静岡県三島市に居住した。その生涯に研究論文約400編、その中で膜翅目昆虫のハチ類のカリバチ類やハナバチ類等の新種と新亜種1,426種を記載し、そのうち、日本産のタイプ標本は「兵庫県立人と自然の博物館」に収蔵されているという。

その採蜂（再訪）当時の北海道総人口は4,949,463人（昭和33年10月道統計局調べ。田中敏文知事時代）。青函連絡船は1988（昭和63）年3月13日に青函トンネルに役目を譲り、航行を終える。

「北海道新幹線」開通でスピード時代開幕となったが、ハチを追って列車に揺られ、途中下車でネットを手に歩き回り、見知らぬ人々とふれあうこんなのかな旅の記憶は、ひと昔前の心あたたまる風物詩ではないか。

## 活動報告

## ミュージアム・カフェ「ナイトセミナー」と「ナイトコンサート」の紹介

## 金曜ナイトセミナー

星野フサ（植物・図書ボランティア）

北大総合博物館で地球科学を担当しておられる山本順司先生が9月23日（金）夜7時～8時に「この地球にあるマグマの出口～5つ目を見つけました～」と題して講演をされました。遅い時間なのに参加者は20名を超える盛況振りでした。

最近の高校地学の教科書によると、地球上には海のプレートが生まれる中央海嶺、日本のように海のプレートが沈み込んでいる沈み込み帯、ハワイのような海洋島を生み出すホットスポット、の3つのマグマの出口が存在しているそうです。

しかし、10年ほど前に、4つ目の出口が三陸沖の太平洋プレートが沈み込んでいる日本海溝の海洋側（東側）で、山本先生も含むグループによって発見され、プチスポットと名付けられました。そこには、地下深部のリソスフェアとアセノスフェアの間に存在するマグマが湧き出しています。

そして今回、山本先生はロシアやモンゴルにおいて、これまでの4つのカテゴリーに当てはまらないマグマの出口を発見されました。その化学分析の結果は海水の寄与を示していたため、この溶岩は海のプレートとともに地下深く沈み込んだ海底の水分の影響で生まれたマグマからできたと推定されました。

いろいろなマグマの出口は、地球内部のエネルギーや物質が地球表層に出てくる場所と言えます。したがって、このような出口は、私たちを取り巻く環境の変遷に対して、地球深部の活動が与える影響につながります。持続可能な社会の構築を目指す上で、地球内部の潜在的影響力に思いを馳せるのも大事かもしれませんね。

このような少しアカデミックな講演が今後も続きそうです。金曜日の夜は北大総合博物館に出かける予定を組んでみてはいかがでしょうか！

## 金曜ナイトコンサート

山岸博子（図書ボランティア）

リニューアル・オープン後の北大総合博物館は、6月から10月までの金曜日は、夜9時まで開館となり、ミュージアム・カフェでは「ナイトコンサート」も開かれます。

8月の金曜の夜に「ナイトコンサート」が2回開催されました。

8月5日（金）は北大交響楽団のヴァイオリン、ヴィオラ、ベース、オーボエ、クラリネット、ファゴットとポプラチェンバロの演奏会でした。

「都ぞ弥生」から始まり、若さあふれる演奏と新妻さんのチェンバロが、夜の博物館を素敵な空間に変えていました。好みの飲み物を片手に聞くクラシックは、親しみやすく、とても素晴らしいと感じました。

8月19日（金）は「北海道ジャズグラス・トリオ」と題して、ニュージーランドからの特任教授（昆虫の研究者）のリチャードさんと「北大ブルーグラス研究会」のマンドリン阿部君とヴァイオリン本間さんのトリオのジャズ演奏会でした。

夜の博物館にジャズの音色が心地よく響き、とても楽しい時間でした。

リニューアル・オープンした北大総合博物館のミュージアム・カフェでは、葡萄酒やビールなどの酒類も飲めるようになりました。

ビールやコーヒーを飲みながら聴くセミナーやコンサートは格別です。



リチャードさんと阿部君と本間さん

活動報告

北大構内食べ歩き

平成遠友夜学校ボランティア 大山 圭也

北大構内は観光客のみならず、札幌市民にとっても魅力的な散策の場所である。といっても広いキャンパスであるから時折休憩も必要であろう。構内には、学生食堂も含めると多くの飲食スポットがある。低価格でメニューが豊富な学食は、混雑している昼時を除けば一般客もゆっくり利用できるが、今回は学食以外で一般の方々が利用しやすいと思われる三店を紹介したい。

「エルムの森ショップカフェ」

正門を入れて、すぐ左手に「エルムの森ショップ」がある。多くの観光客が正門を起点として大学構内を散策するのでインフォメーションセンターとしての機能を果たしているのだが、カフェの利用も多い。有機栽培コーヒー（260円）をはじめ飲み物は15種類ほど。食事メニューもビーフカレー（420円）、ミートスパゲティ（550円）など6種類。セルフサービスだがそのぶん価格もリーズナブルである。ソフトクリーム（260円）は3種類。ハスカップの酸味が美味しい。また、ガラスの壁にかこまれたテーブル席は、屋内外とも広々として気持ちがよい。営業時間は8時半～17時。年中無休。

「レストランエルム」

中央食堂と大野池の間にある「エンレイソウ」内の「レストランエルム」は札幌グランドホテルが経営している。お薦めは3種類の週替わりランチメニュー。Aランチ（1080円）、Bランチ（1240円）、エルムランチ（1240円）、いずれもスープ、

サラダ、コーヒーが付く。クラークカレー（1140円）も季節の野菜がたっぷり美味しい。価格もホテルレストランとしてはリーズナブル、接客も良好で十分に満足できる。また、ガラス越しに北大構内の自然を満喫しながらのティータイムも楽しい。営業時間は11時半～17時。土日祝日休業。

「ぼらす」

リニューアルオープンした総合博物館内にカフェができた。食事メニューは、マンモスハンバーグランチ（900円）、ルルロツソのミートパスタ（800円）、ネパールの豆まめカレー（800円）、こだわり卵のオムライス（800円）の4種類。お薦めは、西興部村の牛乳を使用したソフトクリーム（400円）。美味しい。飲み物は、コーヒー（350円）、ラテ（400円）、ビール（500円）、グラスワイン（500円）など。営業時間は8時半～22時。モーニングトーストセット（550円）もある。博物館と同じく月曜日は休業。



北大総合博物館に新設された「ぼらす」

北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース No. 42

- ◆編集人：北海道大学総合博物館ボランティアの会（編集委員：星野、今井、大山、児玉、沼田、山岸）
- ◆発行人：在田一則
- ◆発行日：2016年9月1日
- ◆連絡先：〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel: 011-706-2658
- ◆ボランティア ニュースは、博物館のホームページからご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>